佐久市立臼田小学校　学校便り　№12　R8．2．16　　文責　村山（教頭）

コスモ・スクール　うすだ

一人一人が輝き　つながり　未来を拓く

特別ではない「朝」のひととき　～「そこに在る」ということ～

子どもたちの「動き方」に、この学校の豊かさが滲み出ていると感じることがあります。

「動き方」という言葉を選んだのは、それが単なる体の移動ではなく、子どもたちの「心の揺らぎ」そのものに見えるからです。友だちと弾むような声を交わす子、校庭で風を切って走る子、当番活動に背中を丸めて打ち込む子。どの子の動きも、その子だけの固有の「朝」を生きています。

そんな、一見すると当たり前の風景の中に、私は臼田小の大切な「宝物」を見つけました。 それは、朝の図書館の光景です。

朝の時間は、本の貸し借りができるわけではありません。それでも図書館の扉は開かれ、そこには吸い寄せられるように子どもたちが集まってきます。 昇降口の喧騒を抜け、ふと図書館を覗くと、そこには驚くほど濃密で、しずかな時間が流れています。

机に向かって一心にページを繰る子。畳の上で足を投げ出し、物語の世界にどっぷりと浸かっている子。ソファでは、小さな肩と肩が触れ合うほどの近さに座りながら、互いの存在を認めつつも、それぞれの本が映し出す異世界へ旅を続けている子たちがいます。

誰かが誰かを律している訳ではありません。それなのに、そこには美しい「秩序」があります。 図書館の窓の外には、中庭で光を浴びて躍動する子たちの姿が見えます。その動的な輝きと、図書館でじっと本を見つめる子の内的な輝きは、決して別のものではありません。外へ向かう想像力と、内へと浸り込む想像力。そのどちらもが、子どもたちが「子どもらしく」あるための大切な呼吸なのだと思うのです。

朝の放送が流れると、物語の魔法が解けたかのように、子どもたちはそっと立ち上がります。 自分が座っていた場所をなでるように整え、本を元の棚へと、そっと戻していく。その指先のしぐさに、この空間を慈しみ、自分たちの居場所を大切にしようとする彼らの矜持（きょうじ）が宿っています。

こうした「特別ではない朝」を、自分たちの手で作り上げている子どもたちを、私は心から誇りに思います。 静かで安らかな空気の中で、一冊の本を介して自分自身と向き合う時間。 そんな豊かな一時（ひととき）が、今日も臼田小の子どもたちの根っこを、静かに、深く、耕してくれています。

非違行為防止研修を実施しております

臼田小学校では、教職員の非違行為の根絶に向けた職員研修を定期的に取り組んでいます。

- 非違行為防止セルフチェックを実施し、職員の意識を高めています。
- 飲酒運転防止研修として、佐久警察署交通課より外部講師を招聘し研修会を８月に実施しました。
- 個人情報の管理を徹底し、職員貸与 PC には外部メモリ（USB メモリや SD カード）を接続できないようになっています。
- 職員研修や職員会議等で、実際の事例をもとに非違行為防止について注意喚起をしています

「本と心が行き来するプロジェクト」

図書室の一角に設けられた特設コーナーに、一人の子が立ち止まります。 その子が手に取ったのは、地域の方がおすすめしくださった一冊の本。その本の下には、見知らぬ誰かの手書きのメッセージカードが添えられています。

「私が子どもの頃、この本を読んで勇気をもらいました。」

「この物語に出てくる風の匂いを、みんなにも感じてほしい。」

子どもは、じっとその文字を追いかけます。 ただ物語を読むのとは、少し様子が違います。カードの筆跡をなぞり、そこに込められた「誰かの想い」を、吸い込むようにして読んでいるのです。その瞬間、子どもの瞳がふっと輝きを増すのを、私は見逃すことができません。

本を開く。それは、かつてその本を愛した人の「まなざし」を追体験することでもあります。子どもたちは、本の内容だけでなく、自分たちの成長を願い、一筆をしたためてくれた「あなた」の存在に、静かに思いを馳せているようです。

佐久の地に根付いた「若草号」の文化は、本が人を訪ね、人が本を待つという、美しい信頼の形でした。このプロジェクトもまた、その精神を受け継いでいます。

今、学校と地域の間には、目に見えないけれど温かい、新しい「若草号」が走り始めています。それは、皆さんの心の本棚に眠っている思い出や、大切にされてきた言葉を、今を生きる子どもたちへと届ける往復書簡のようなものです。

もしよろしければ、皆さんの人生のそばにあった一冊を、臼田小の子どもたちに教えていただけないでしょうか。難しい知識はいりません。臼田図書館の蔵書の中から、おすすめの本を選んでいただき、「面白かったよ」「この絵が好きだった」 そんな、皆さんの体温が伝わるような言葉を添えてください。

皆さんが選んでくださったその一冊が、子どもたちを癒やし、あるいは未来への扉を叩く力になるかもしれません。図書室で本を抱きしめる子どもたちの姿は、この町が「物語」でつながっていることの、何よりの証です。

この「本と心が行き来する」風景が、一時の流行ではなく、臼田の新しい当たり前（文化）として根付いていくことを願っています。

皆さんの「心」が届くのを、子どもたちと共に、図書室で静かにお待ちしております。

上がり框（あがりかまち）

本校の玄関にどっしりと鎮座する、石製の上がり框（あがりかまち）。バリアフリーが推奨され、段差を「排除すべきもの」と捉える現代の合理主義の中で、設計者はあえてこの堅牢な石の一段をここに据えました。それは、利便性よりも大切なものがあると考えたからに違いありません。

上がり框は、外の世界の喧騒を断ち切り、聖なる場所、清い場所へ足を踏み入れるための「句読点」です。この一段を越えるとき、子どもたちは無意識に歩みを止め、靴を脱ぎます。設計者がこの校舎に込めたのは、単なる造形ではなく、子どもたちの心を守るための「境界」だったのでしょう。

今、その冷たく硬い石に、そっと掌（てのひら）を当てる子どもたちがいます。絞った雑巾を手に、深い前傾姿勢で石の肌を丹念に水拭きする姿。膝をつき、地を這うようにして、石のひとつひとつの表情を確かめるその様子は、あたかもこの場所の神聖な意味を知っているかのようです。

石は沈黙を守ったままですが、磨き上げる指先からは確かな体温が伝わります。黒光りする石の肌が静かに神聖さを湛え、そこにある空気までもが、透き通るように美しく見えるのでした。